

佐藤通雅歌集

『岸辺』

(角川書店)

思案に富み、繊細で、生き生きとした生命のゆらぎを感じる第十二歌集だ。

わからないことの多さにおびえてみた空は苦しいばかりに広がった

コーヒー豆の一粒を菌に当ててみるかつて鳥類だった気がして

「聴く」と「聞く」の能動受動の中間の「きく」にて草の虫の音をきく

五十一年前の第一歌集『薄明の谷』から作品には変わらぬみずみずしいまなざしがある。『岸辺』では、その視点がより深く

なり、広がりを見せている。

震災、古い、病、戦争などの大きなテーマと、自分の小さな日常を地続きの生として詩に昇華する。身めぐりの大事、小事を

自分のものとして歌うことは、いかに生き易くすかということだ。

八月の三つの忌終へてふたたびを三六五日の忘却へ入る

生きる事終へたらけて注しはせぬ目薬二ついま指は持つ

日々によるこびも悲しみも苦しきも、そして命のなかに詩がある。(斎藤 美衣)

大辻隆弘歌集

『樟の窓』

(ふらんす堂)

二〇二一年の三六五首が収められた短歌日記シリーズの一冊。日常のささやかな発見や心情が着実な描写とともにしずかに詠われている。

ここはわたしがあつ場所などではないのだと長く思ひて職を続け来つ

三月三十一日、県立学校の教諭を定年退職した作者の言い尽くせない思いがにじむ

新たな職場は樟が風に鳴る下影にわが車を駐めて

四月六日、再任用の教諭としての初日。樟の描写に新たな環境への期待と少しの高揚が伝わる。どっしりとした古い樟の存在

を感じながら作者は学校での時間を過ごす。若き日の思ひのごとくはなんなりと兆す

火照りのなかをたゆたふひとの背にさしあぐねたるひと振りの

傘ありき秋雨のさなかに前者はワクチン接種の一首。現在をゆつ

たりと受容するような歌。内省の歌も多い。「つくづく歌が好きなのだ」と再確認した

という作者にとって短歌は樟のような存在かもしれないと感じた。(富永恵美子)

渡辺松男歌集

『牧野植物園』

(書肆侃侃房)

作者の第十歌集。四百首を収め、その内の三七首は未発表歌である。

赤松はひとつのこらず鏡ゆゑ出口のあらぬ赤松林

歌集冒頭の歌。赤松を鏡と比喩し、赤松林を合わせ鏡と捉える。恐ろしいほどに緊張感のある一首だ。作者の歌は常にこの緊張感を絶やさない。それは筆致の緻密さ、

そして視線の俯瞰性に顕れている。ゆびさきに死の国があり渦をまくその

国五つ日向にさらす己のゆびさきの指紋を死の国と呼び、日に温められる手に、死を見出している。

歩きなば足が忘れてゆく道の歩かむ前の輝きを撮る

「足が忘れ」という擬人化で、己と己の身体の間には独特な距離を持たせている。

作者は、愛情深い故に冷静である。その為、俯瞰的に乾坤を把握する。私性を押し付けられない歌たちは読者の心を強く打つ。

金色の身でありながら号泣のはげしさ

にちる公孫樹の落ち葉

(島本ちひろ)